

立正大学古書資料館蔵  
奈良絵本『大織冠』下巻  
—影印と翻刻—

伊藤 善隆



シリーズ・アタラクシア vol. 6

立正大学古書資料館蔵  
奈良絵本『大織冠』下巻  
—影印と翻刻—

【目次】

冊子本『太しよくはん』下巻影印	1
卷子本『太しよくわん』下巻影印	45
立正大学古書資料館蔵『大織冠』冊子本（下巻）翻刻・注・校異	61
あとがき	72

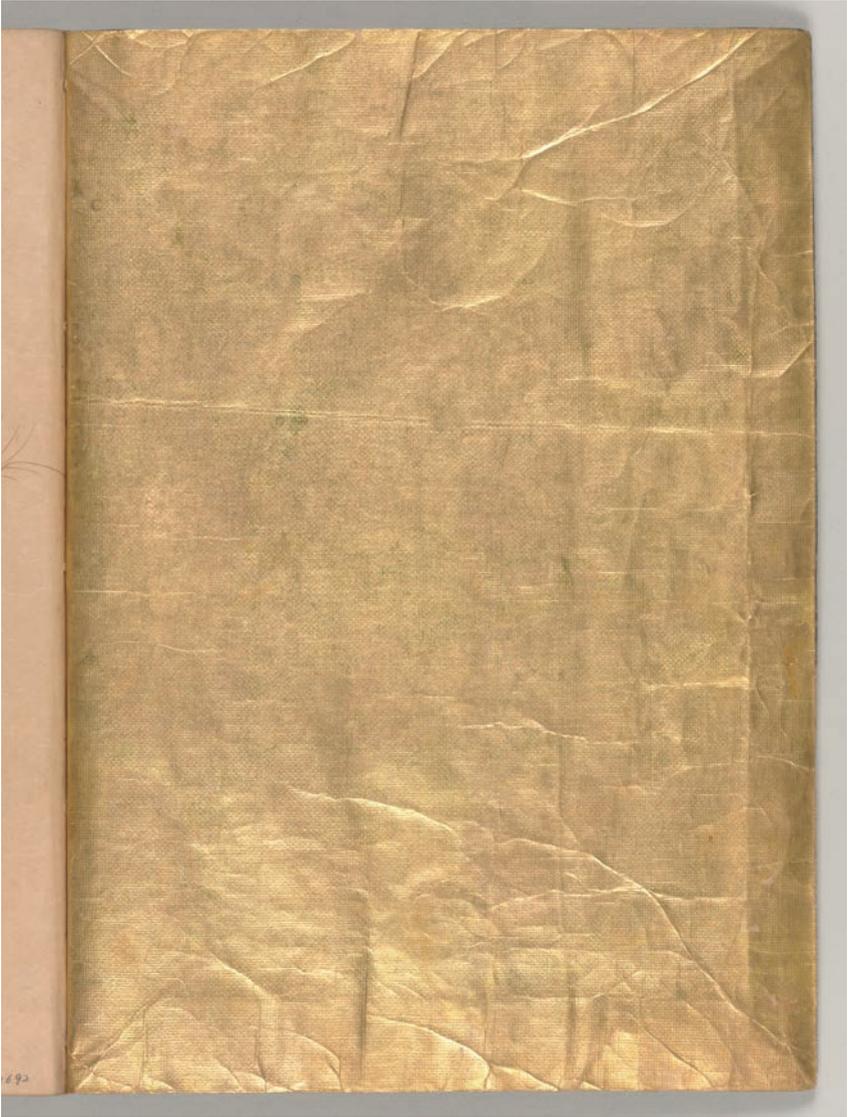


冊子本『太しよくはん』下巻影印





(下巻表紙)



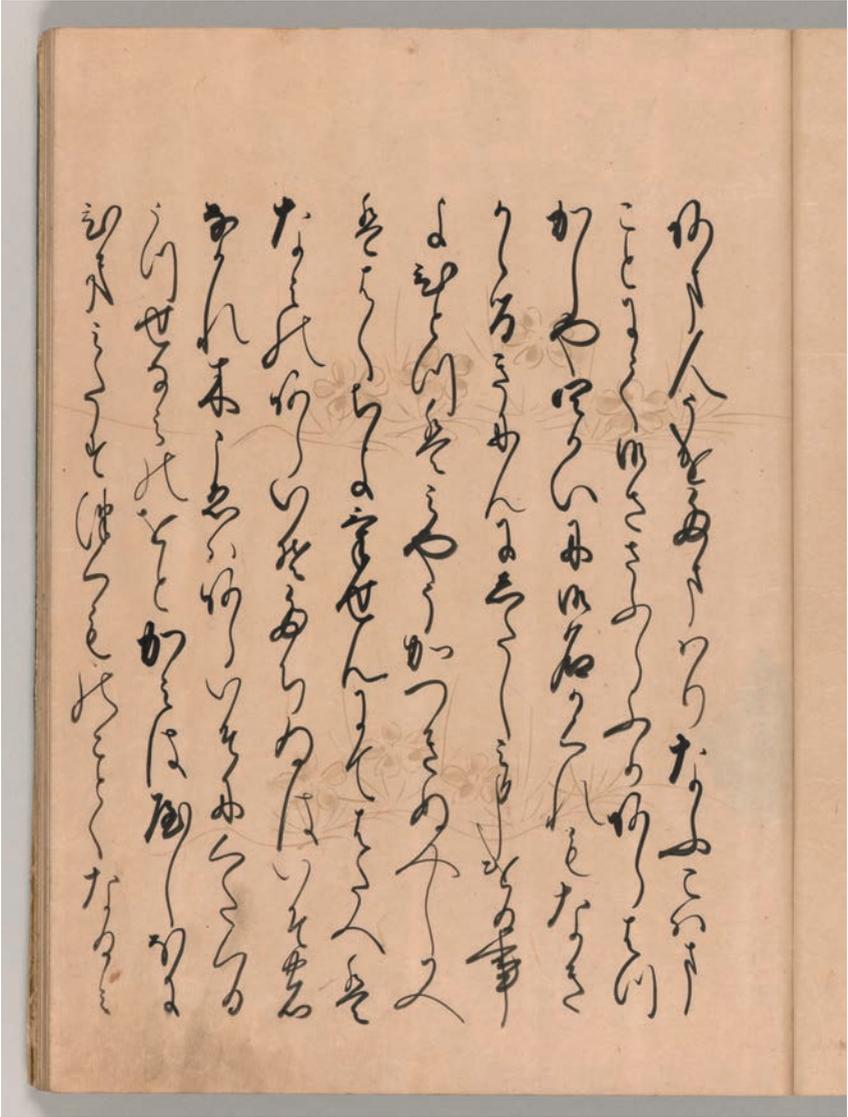
(下巻表紙見返し)



(遊紙才)

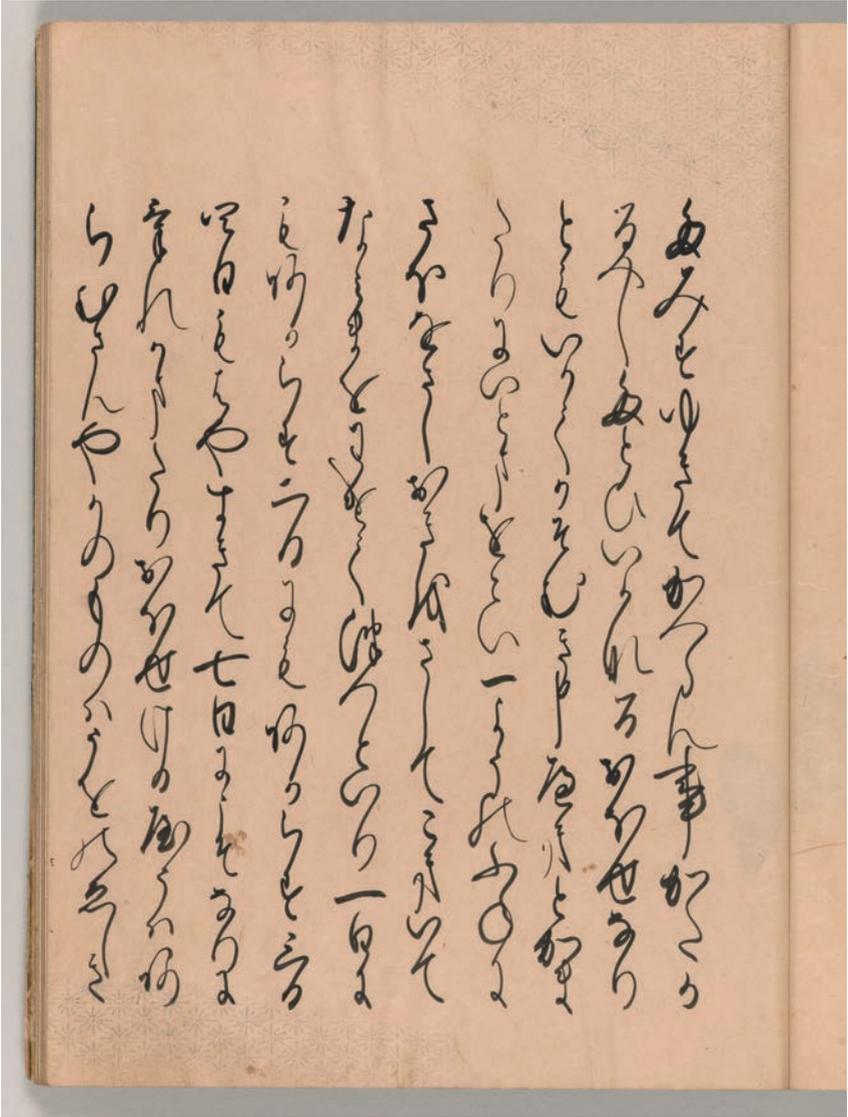


(遊紙ウ)



(一才)





(二才)

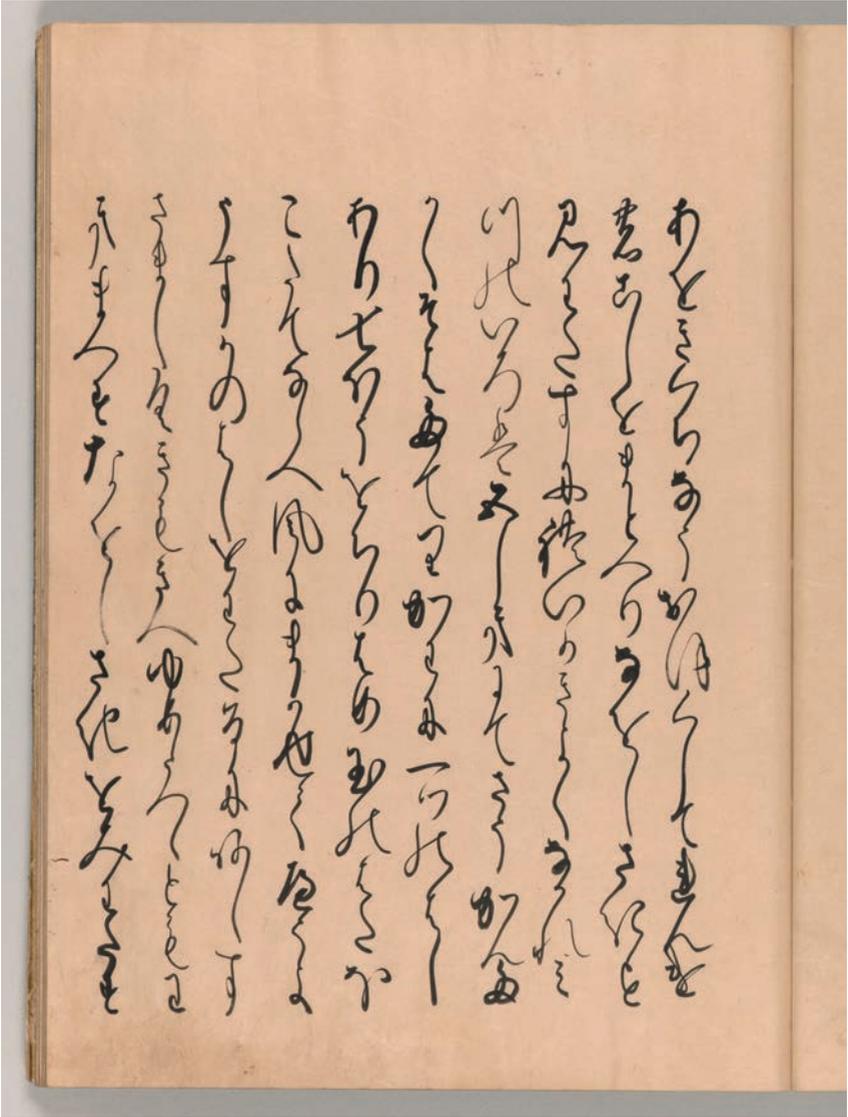




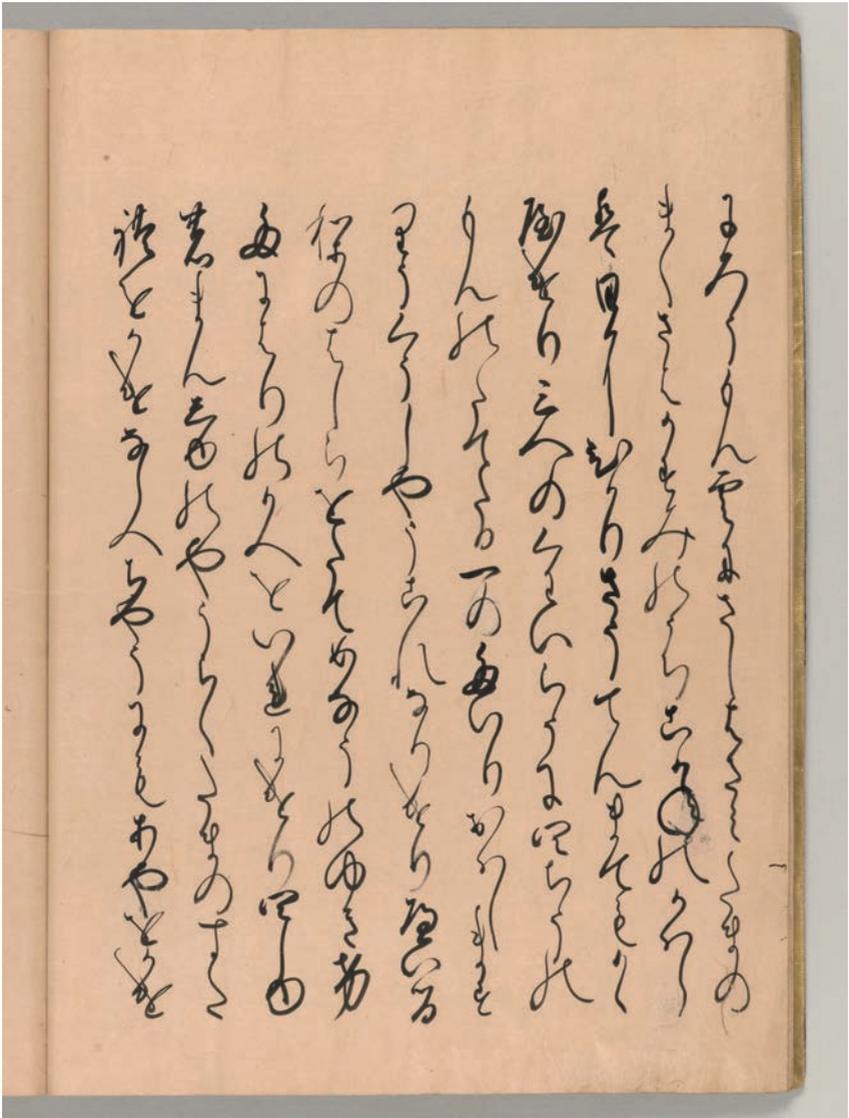
(三才)

何うもことごとく御行入と云ふ一節  
と申す御座候へりしと申すも  
たゞ心もあらつと云ふか  
みらるる事と云ふの事ありと  
申すはしらすと云ふと云ふ  
と云ふ事と云ふと云ふ事と云ふ  
の事と云ふと云ふ事と云ふ  
れまはしらすの事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と

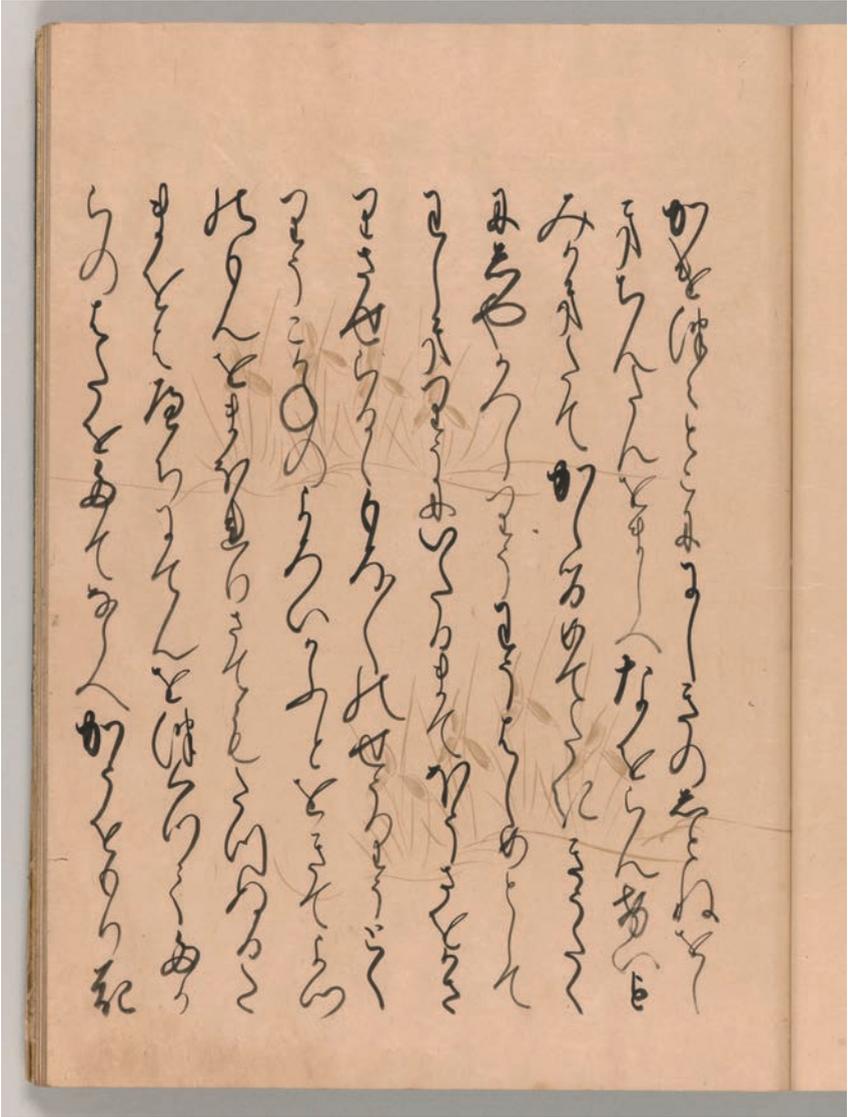
(三ウ)



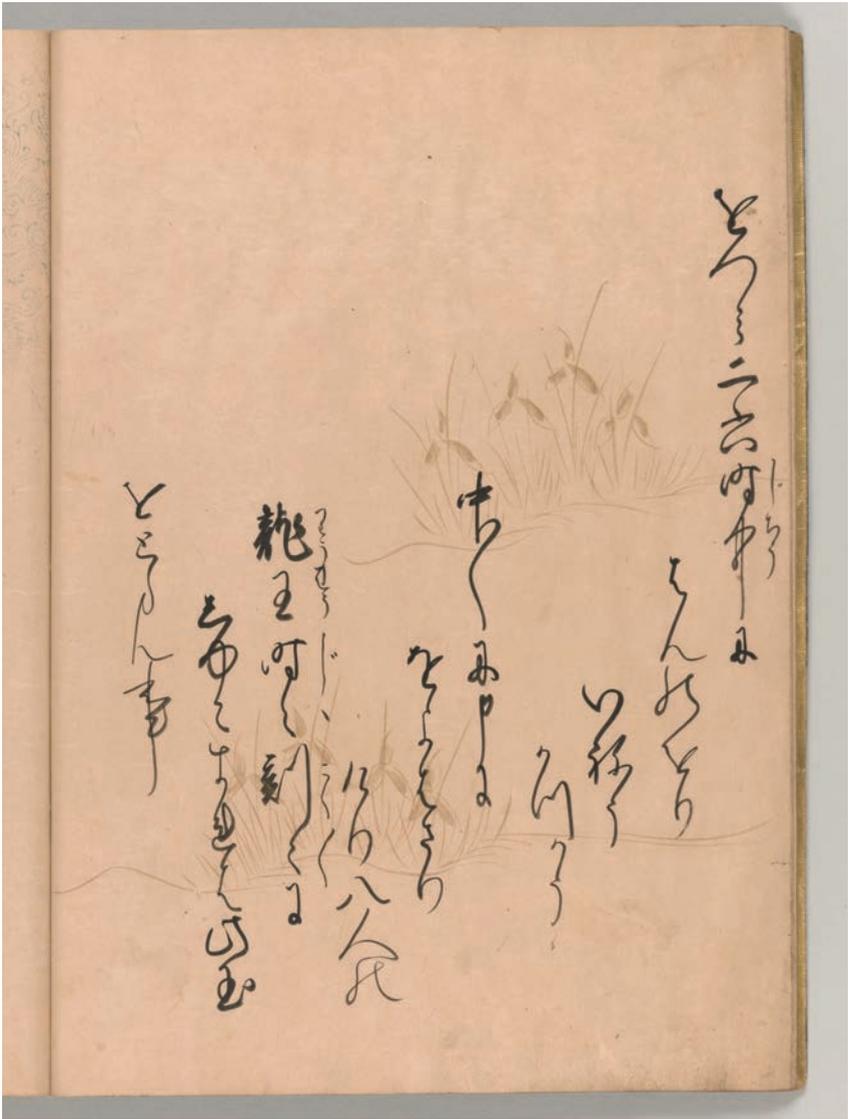
(四才)



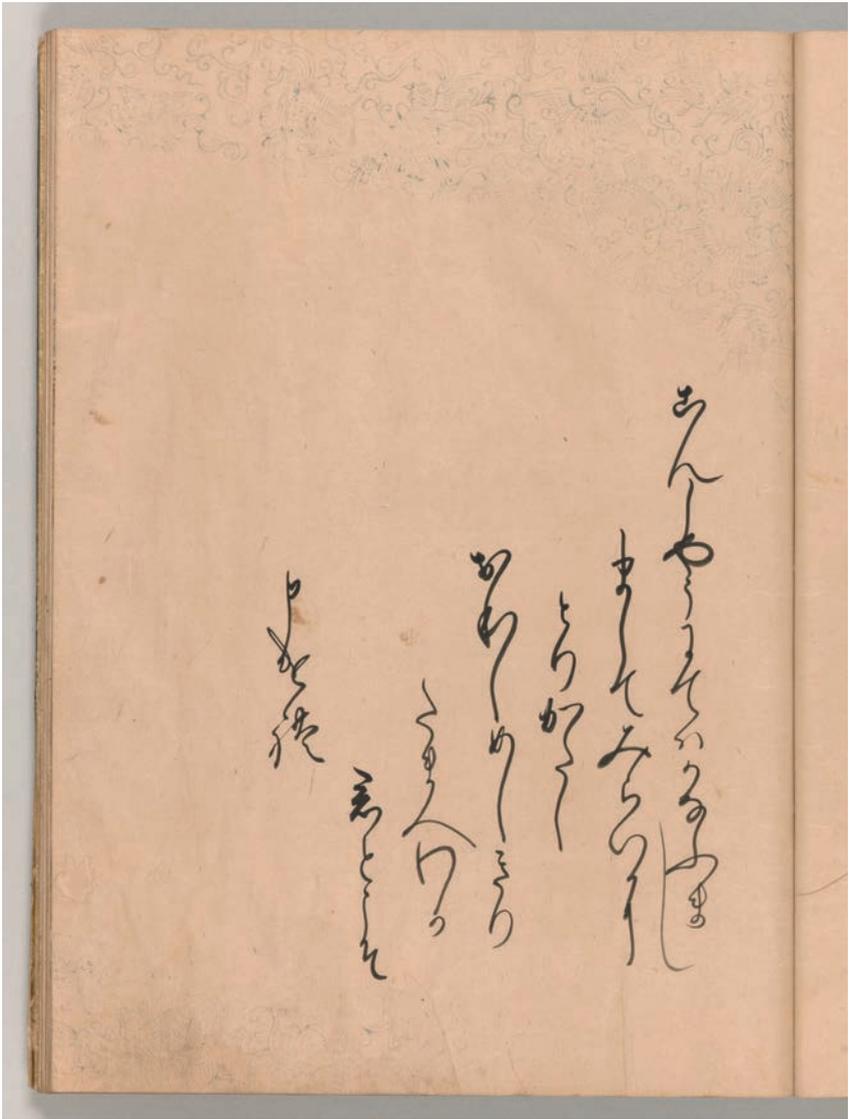
(四ウ)



(五才)



(五ウ)



(六才)



(六ウ)



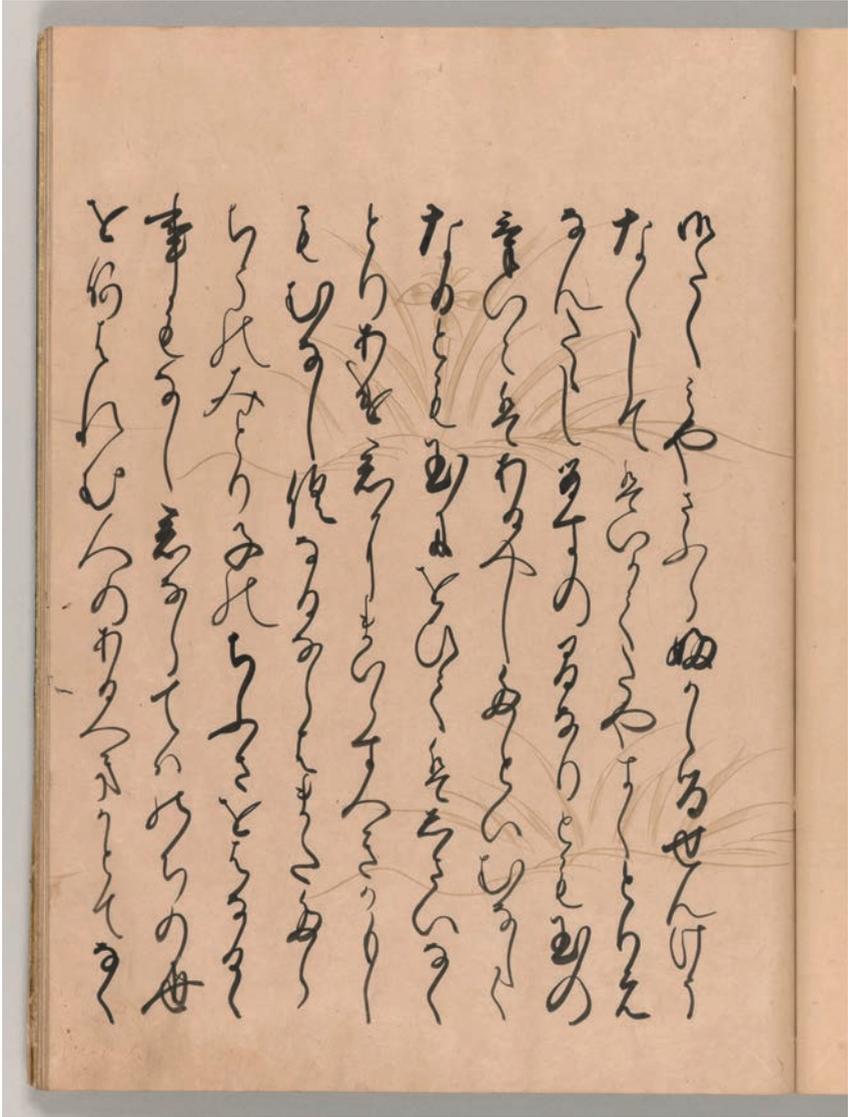
(七才)





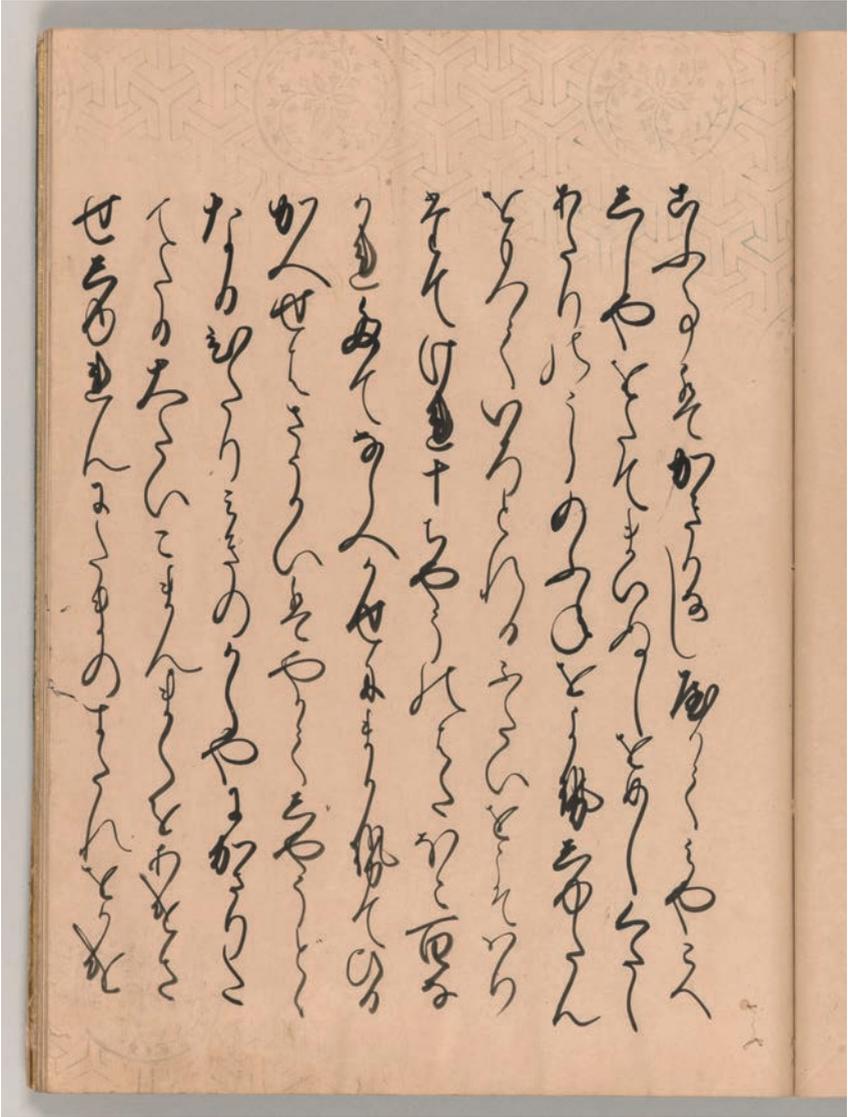
らんごのうしらんもさうさうの  
しんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの

(八ウ)

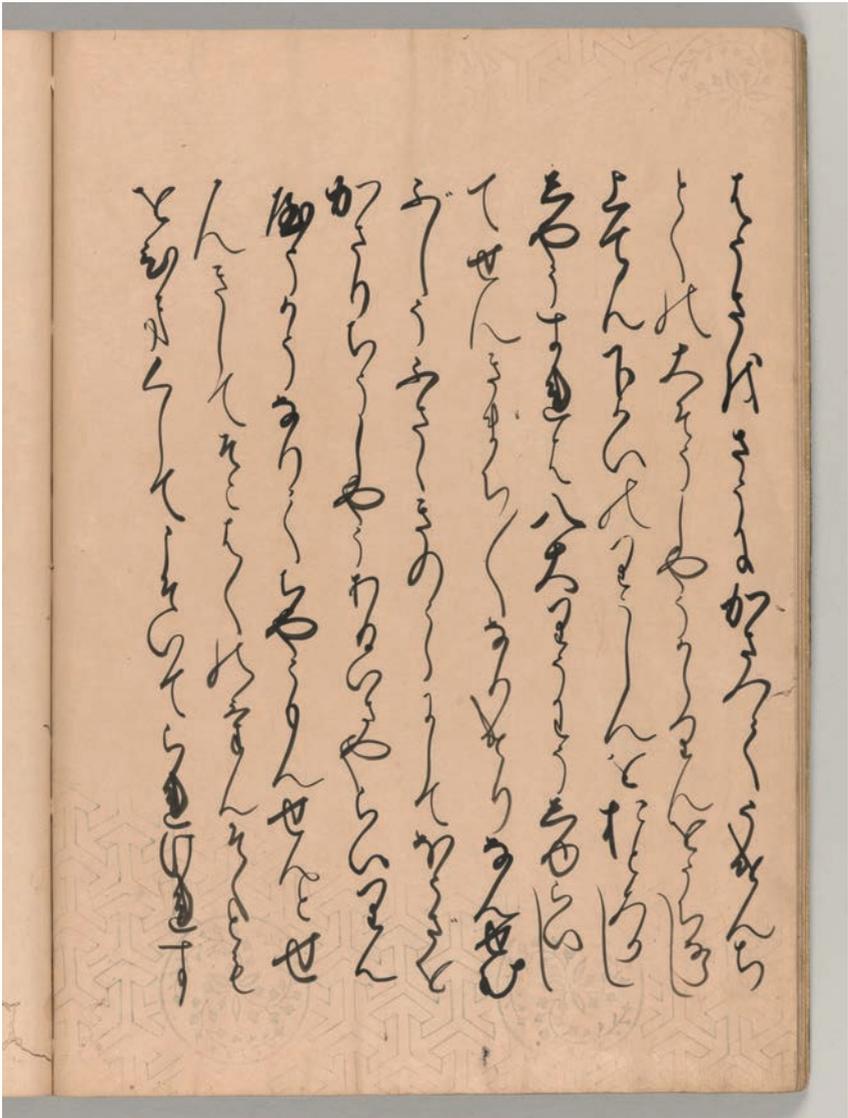


(九才)

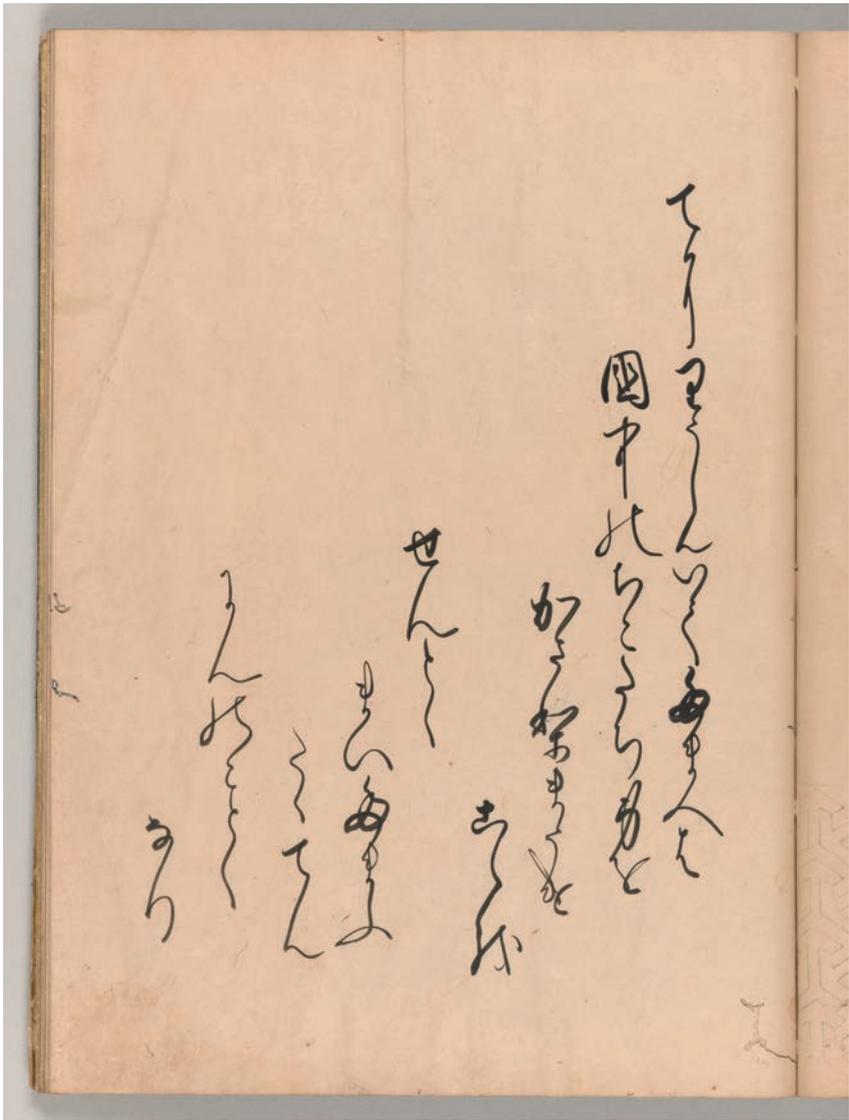




(一〇オ)



(一〇ウ)



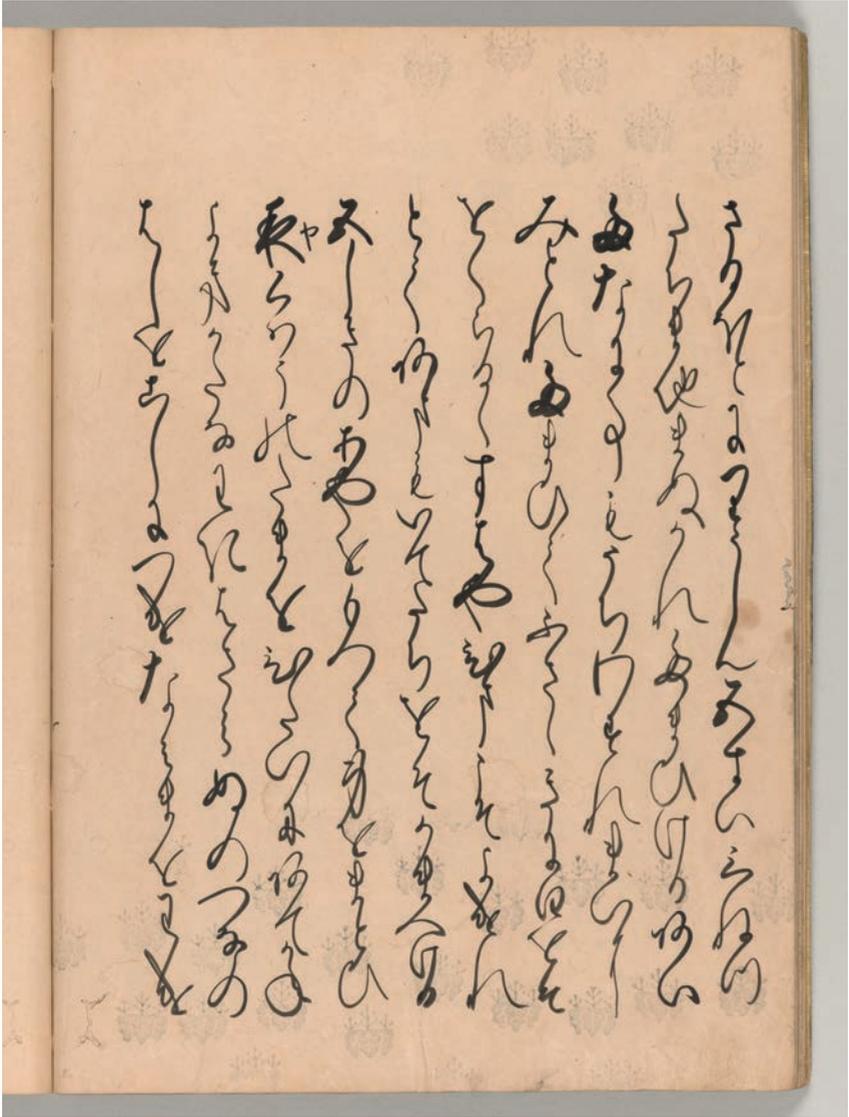
(一一才)



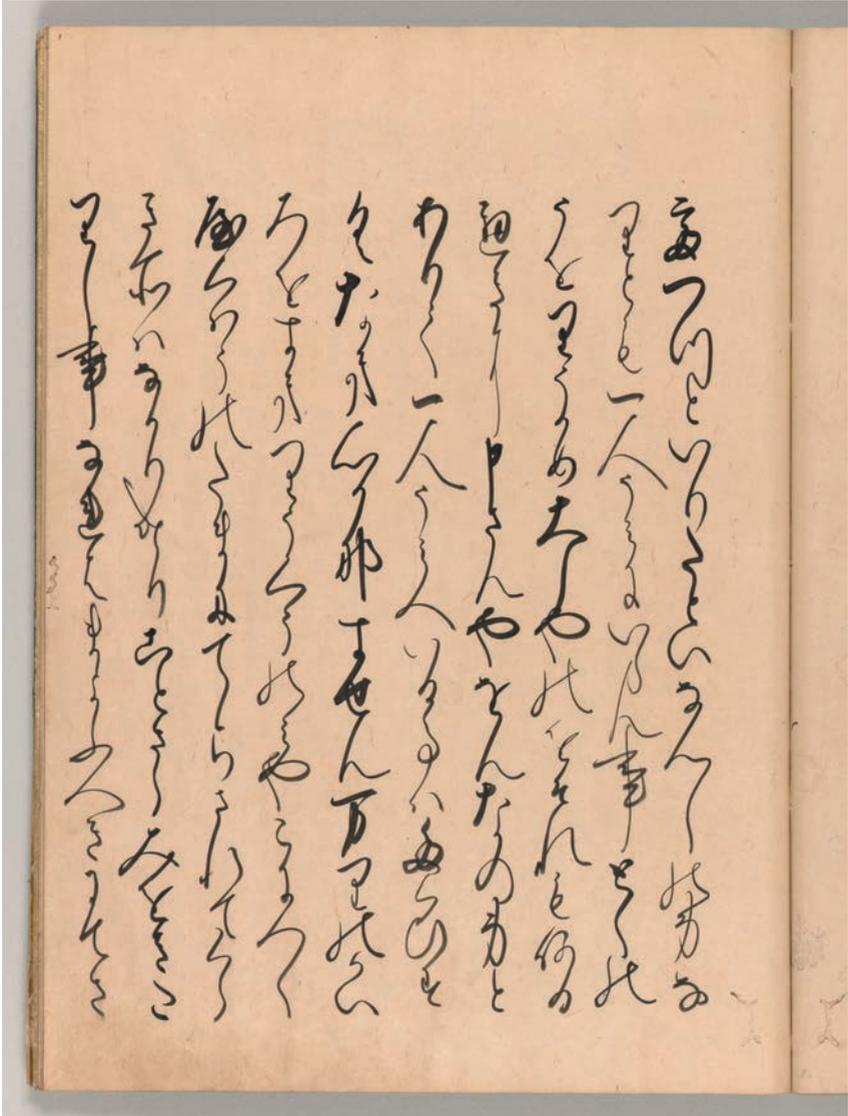
(一一ウ)



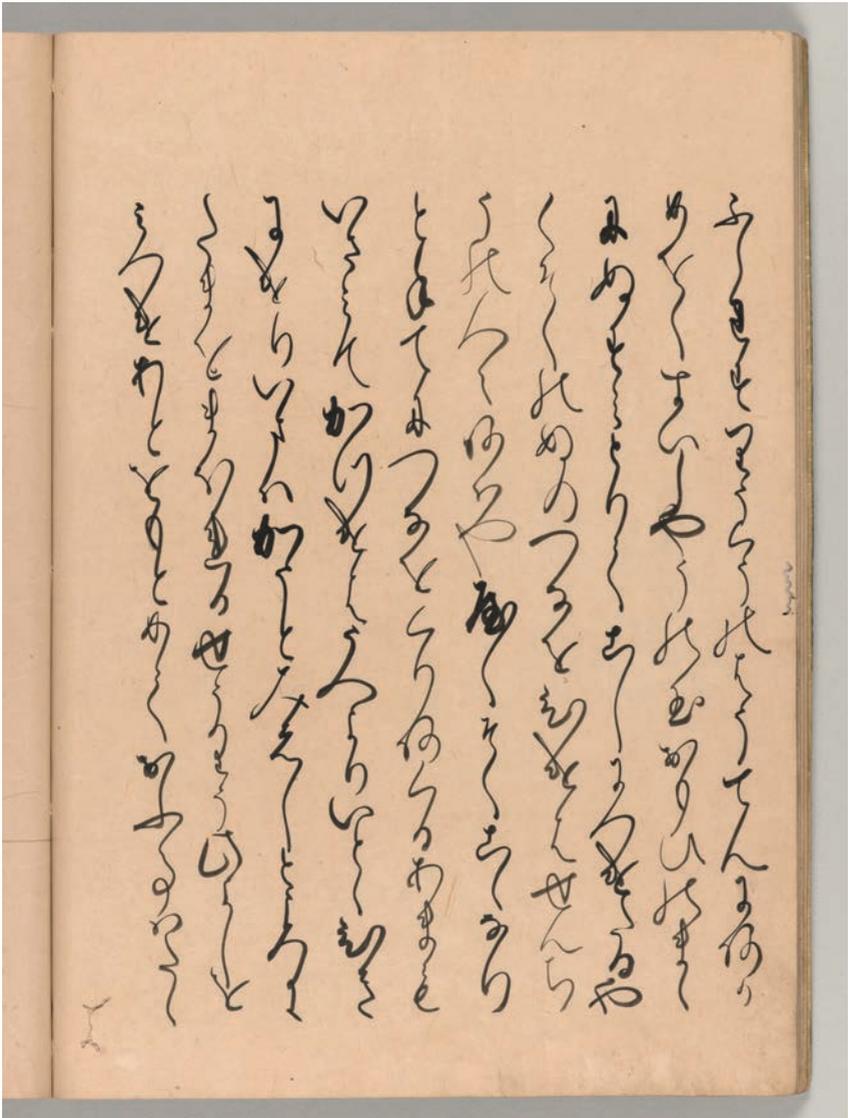
(一二オ)



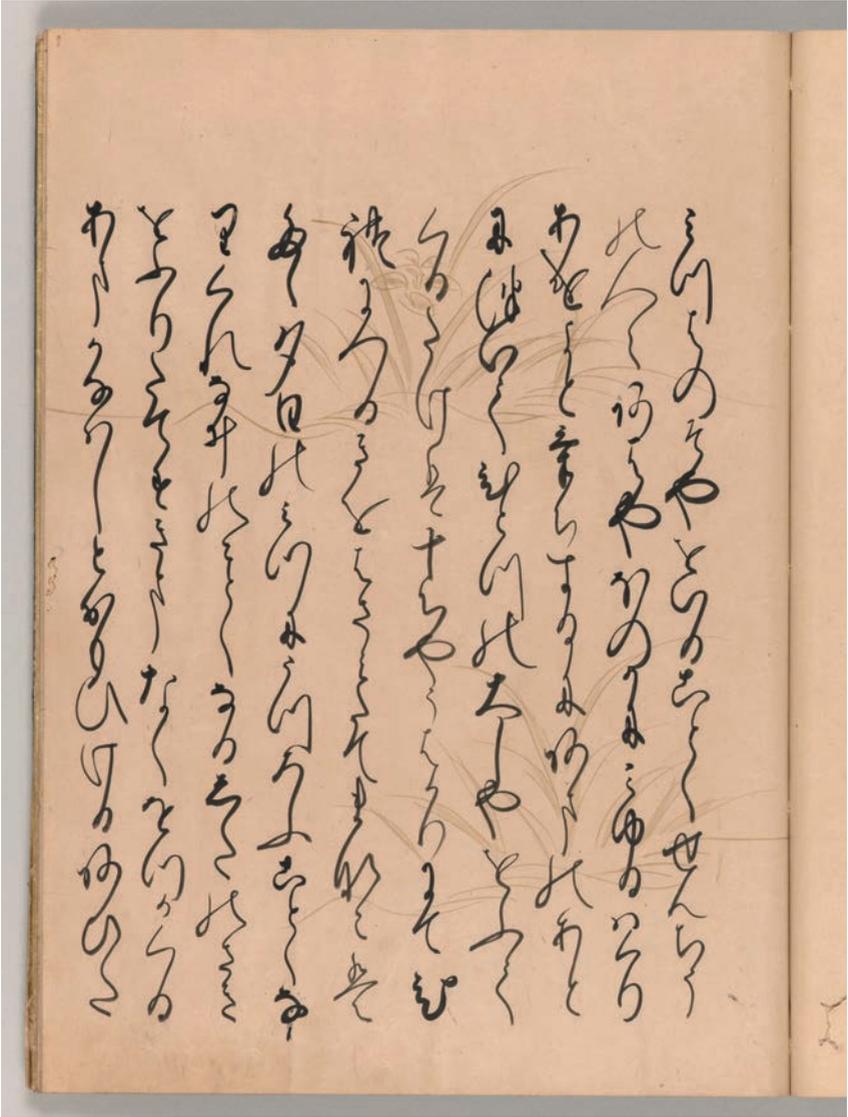
(一ニウ)



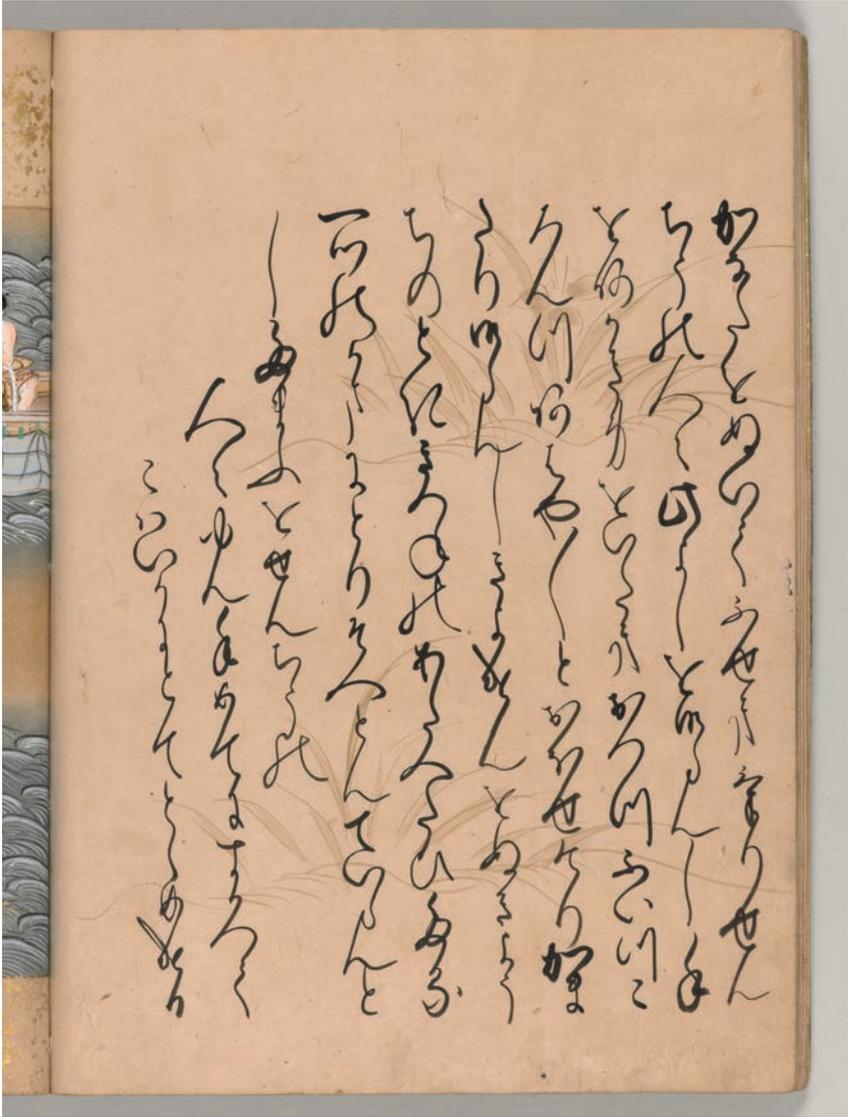
(一三才)



(一三ウ)



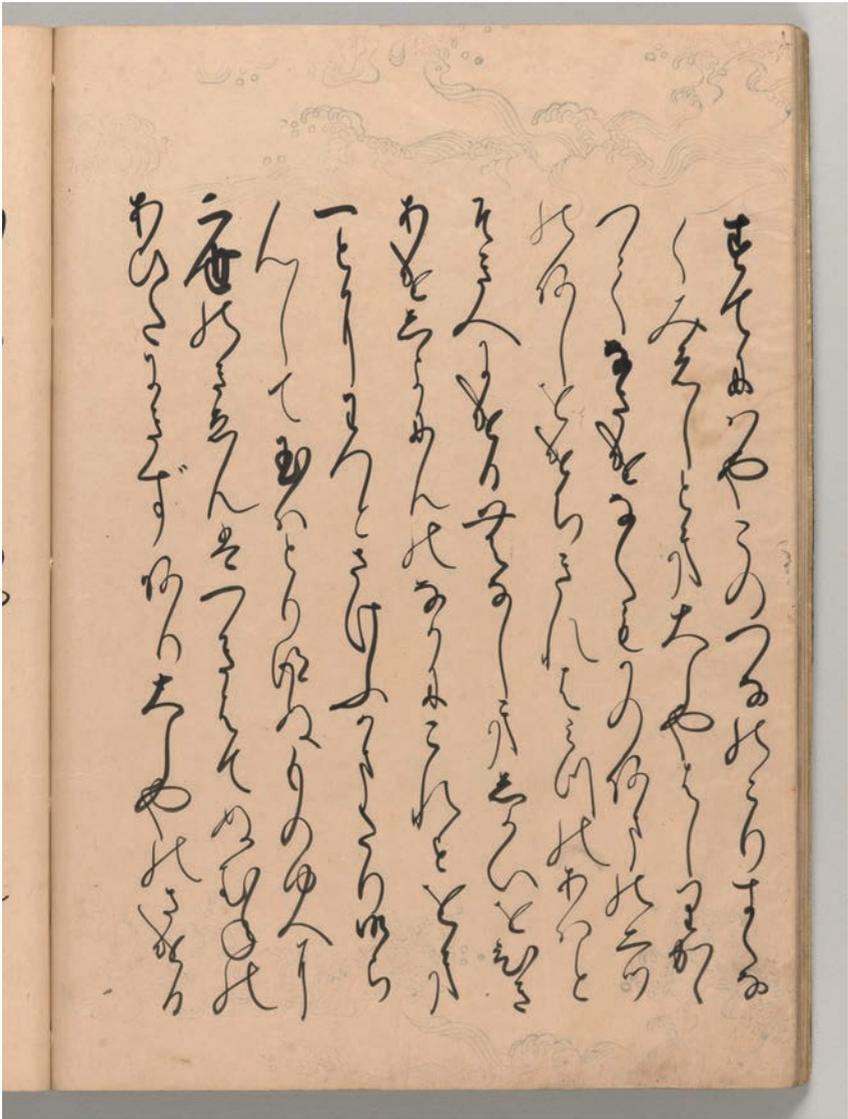
(一四才)



(一四ウ)



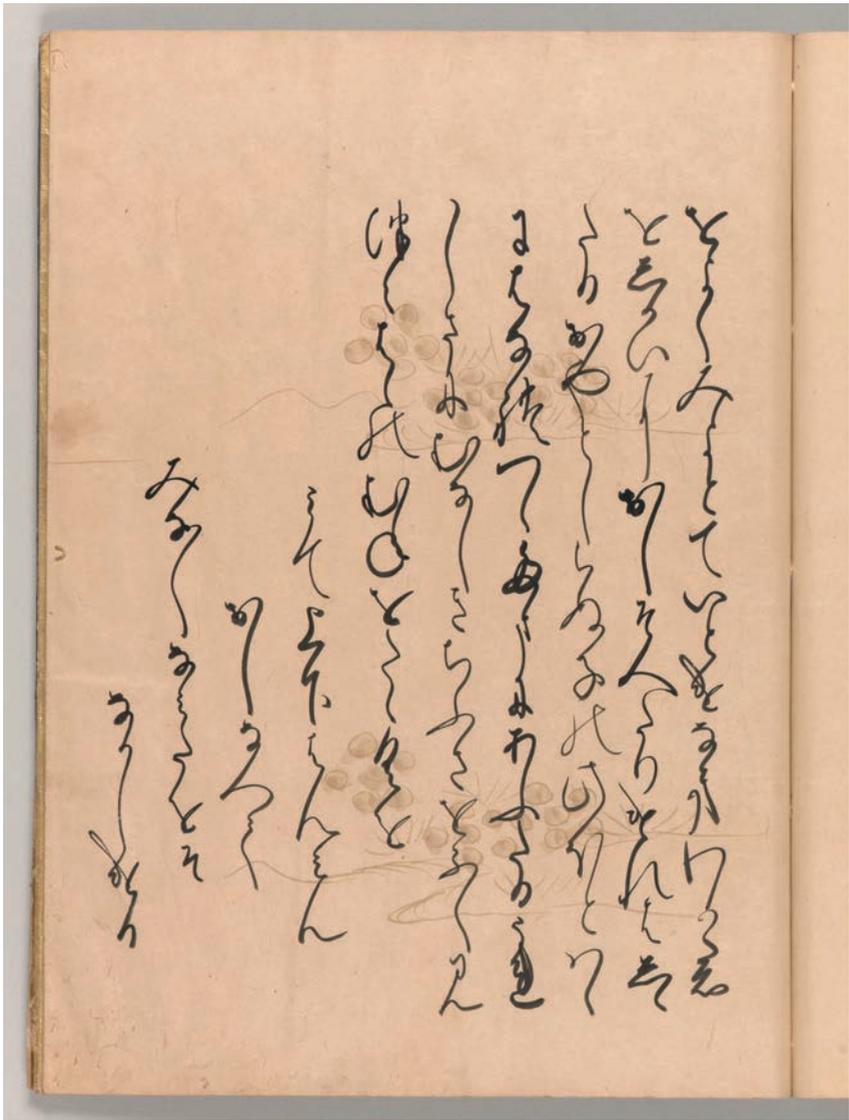
(一五才)



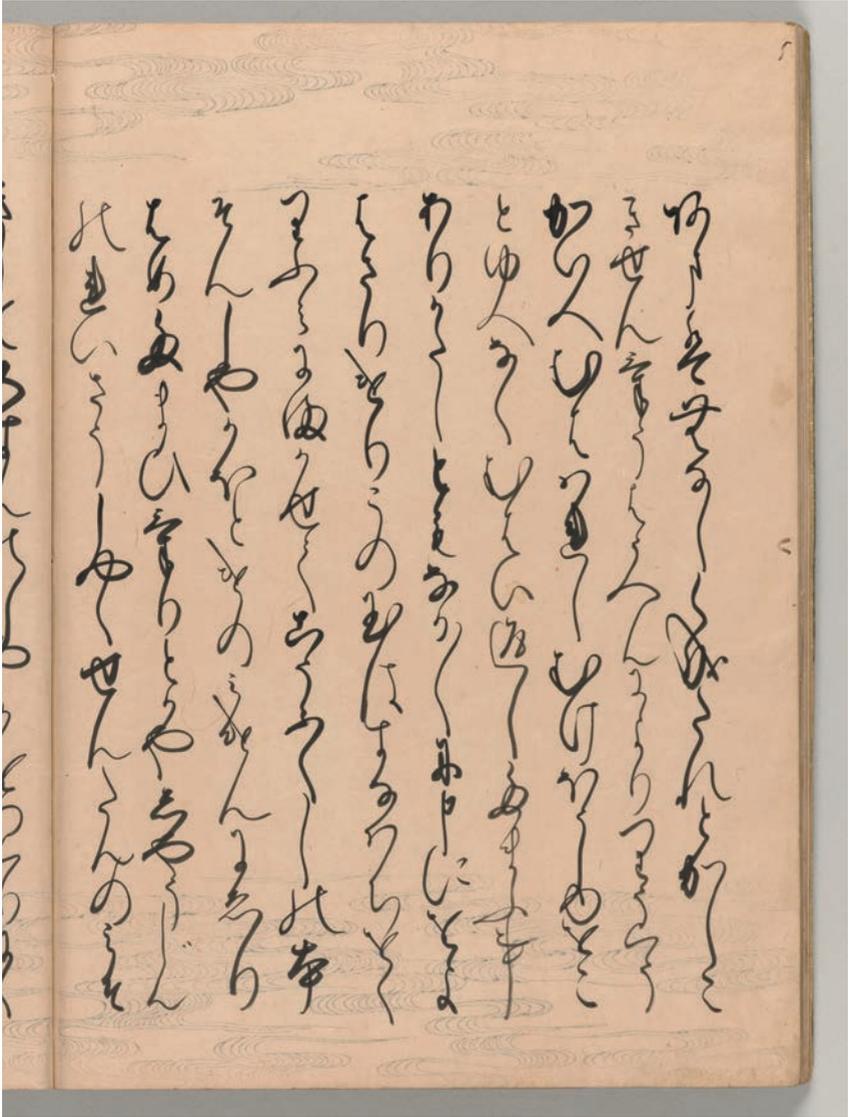
(一五ウ)

Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on a single page. The text is arranged in ten vertical columns, reading from right to left. The characters are highly stylized and connected, typical of the 'sōsho' style. The paper is aged and yellowed.



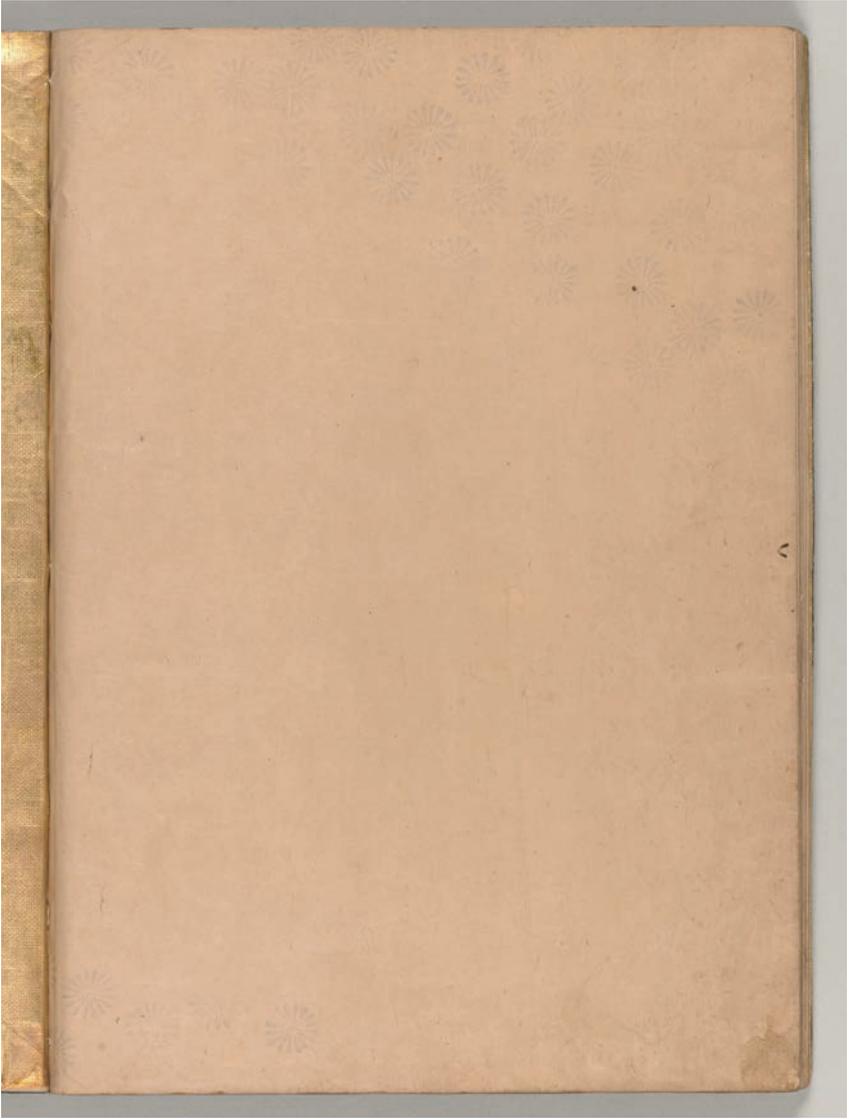


(一七才)



(一七ウ)





(一八ウ)



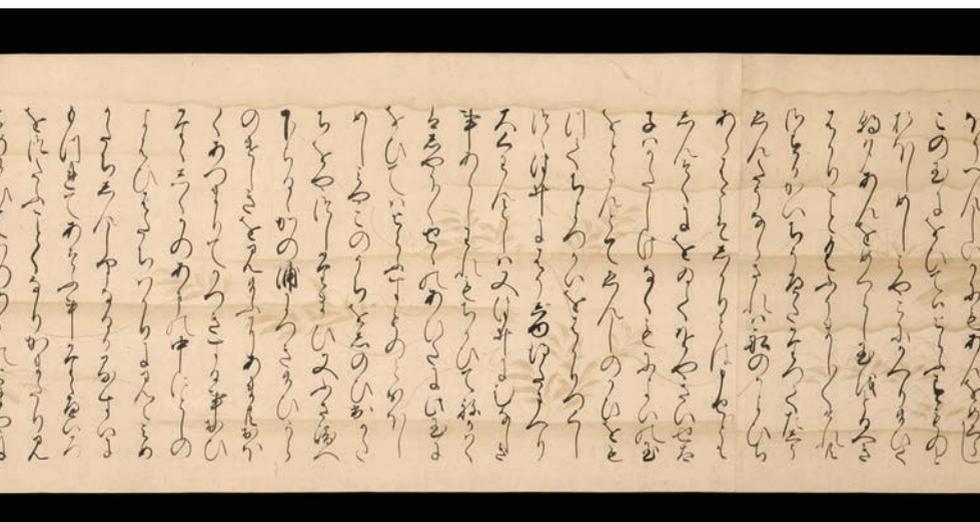
(下巻裏表紙見返し)



(下巻裏表紙)

卷子本『太しよくわん』下巻影印











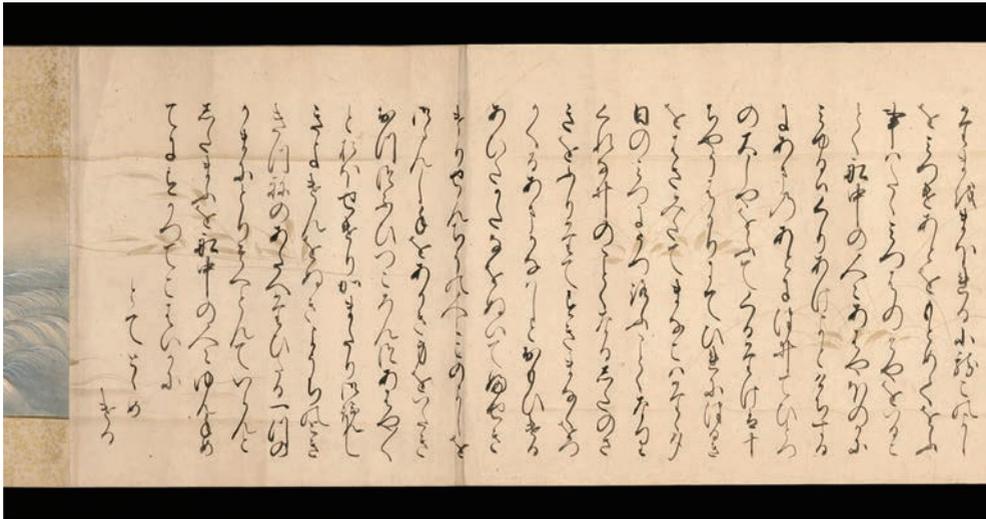






















立正大学古書資料館蔵『大織冠』

冊子本（下巻）翻刻・注・校異

立正大学古書資料館蔵

『大織冠』冊子本（下巻）翻刻・注・校異

※冊子本と卷子本の書誌と、翻刻・注・校異の凡例は、  
本書上巻に掲載。

〈冊子本翻刻〉

太しよくはん 下

あま<sup>海女</sup>人うけたまはり、なふ、こはま<sup>真</sup>

ことにて御<sup>座</sup>ささふらふか。あらはつ<sup>恥</sup>

かしや。四<sup>海</sup>かいに御名かくれもなき、

かゝるきにん<sup>貴人</sup>にしたししみ申ける事

よ。ひとつはみやうかつきぬへし。又

は、はくち<sup>白</sup>よ<sup>女</sup>せんにて、はたへは

な<sup>波</sup>みのあらいそ、たち<sup>立</sup>あ<sup>居</sup>はいその

な<sup>流</sup>かれ木、こ<sup>声</sup>ゑは<sup>荒</sup>あらいそにくたくる

う<sup>打</sup>つせ<sup>瀬</sup>なみのを<sup>音</sup>と、か<sup>髪</sup>みは<sup>八</sup>やしほ<sup>潮</sup>に

ひ<sup>引</sup>き<sup>乱</sup>みたす<sup>江浦</sup>つくものことくなる<sup>身</sup>み

にて、みや<sup>都</sup>このくものうへ<sup>上</sup>ひと<sup>人</sup>に、を<sup>起</sup>き

「（題簽）

「（二オ）

ふし<sup>伏</sup>ひとつとこにして、み<sup>見</sup>へぬる

こそは<sup>恥</sup>つかしけれ。しかし、たゝ<sup>投</sup>身をな

けてし<sup>死</sup>なんとこそは<sup>口説</sup>くときけれ。か<sup>兼</sup>

またり<sup>足</sup>聞しめされて、とてもし<sup>死</sup>せ

んいのちを、わ<sup>我</sup>かた<sup>与</sup>めにあたへ、り

う<sup>宮</sup>くうかいに<sup>分</sup>わけいつて、た<sup>尋</sup>つぬる玉

の<sup>有</sup>ありと<sup>所</sup>ころを<sup>見</sup>みてかへ<sup>帰</sup>れとの御<sup>詔</sup>ちや

う<sup>海女</sup>也。あま<sup>承</sup>人うけたまはりて、り<sup>電</sup>うく

うかいとやらんは、ありとは<sup>聞</sup>きゝていま

た<sup>見</sup>みす。ゆ<sup>行</sup>きてかへ<sup>帰</sup>らん事、か<sup>兼</sup>たか

るへし。たとひいかなるおほ<sup>仰</sup>せなり

とも、いかてかそ<sup>背</sup>むき申へきと、か<sup>兼</sup>ま

たりにいとまをこ<sup>暇</sup>い、一<sup>葉</sup>ようのふ<sup>舟</sup>ねに

さ<sup>棹</sup>ほをさし、お<sup>沖</sup>きをさ<sup>指</sup>してこ<sup>漕</sup>きいて、

な<sup>波</sup>み<sup>間</sup>まをわ<sup>分</sup>けてつ<sup>入</sup>つといり、一日に

も<sup>上</sup>あからす、二日にもあ<sup>上</sup>からす、三日、

四日<sup>過</sup>もはやすきて、七日にこそなりに

けれ。か<sup>兼</sup>またり<sup>足</sup>おほ<sup>仰</sup>せけるやうは、あ

ら<sup>無</sup>むさんや、か<sup>彼</sup>のものは、う<sup>魚</sup>をの<sup>餌</sup>ゑし<sup>食</sup>き

「（二ウ）

「（二オ）

ともなりけるか。あやし怪や、いかに、おほ  
つかなしと、ころをつく心させ給ふ  
ところ所に、よみか蘇へりたるふせい風情

にて、

元  
もとの

舟  
ふねにそ

上  
あかりける。

(第十二回 海女と語らう大織冠)

いかにととはせ給へは、しはしは物  
を申さず、やゝありて申けるは、  
なふ、此とよりりうくうかいへゆく行  
みちは、事もな斜め先の事ならず。  
ひとつのかしらをさきとして、くらき暗  
ところをまほつて、ちいろのそこへわけ分  
いるに、うしほ潮のるす流い水つきぬれは、く紅  
れなみのいろのみつ水そある。なをし底  
そこへわけ分いるに、こかね金のはま浜地に

「(三才)

「(二ウ)

おち落つ着つ伏く。五しきのれん蓮けをいふし、  
あ青をきくち蛇なうおほ多くして、れん蓮け  
のこし腰をま繼とへり。なをし先さきを  
見わたすに、れい麗かき河よくな清かれ、み流  
つ色のいろは五しき色にて、さう双かんた岸  
かくそは時たてり。かわ河に一つのはし橋  
あり。七ほう宝をちりはめ、玉のはたほ幅  
こたて任ならへ、風風にまかせてへう揺よ  
うす。かのはし橋をわたるに、あし足す  
さましく、き肝もき消へ、ゆめ夢う現つ舟ともわ  
きまへす、なをし先さきをみわたす見渡  
に、ろう樓もん門雲にさしはさみ、たま玉の  
まく榻さはかすみのうち、こかね金のかはら瓦  
は日光にひかり、さう著てん天まてもか輝  
やけり。三重へのくわ廻いら廊う重に、四ち重う重の  
もん門のたてたる、一内のたいりおはします。  
り電う宮く城しやう、これなりけり。へ吹いろ溜  
り璃のはし柱らをたて、め立なう瑠のゆ行き術  
たに、はり玻のか壁をいれにけり。四し種ゆ

「(三ウ)

「(四才)

のまんしゆ満珠のやうらく瓔珞、たま玉のすた簾  
れを掛かけならへ並、ちやう帳にもあや綾を掛かけつゝ床、とこ綿に掛しきのし敷とね敷をし敷  
き、ちんたん沈檀を交ましへ交、なをらん鸞鏡けい鏡を  
みか磨きたて立て、か目ゝるめ出度てた宮きさ宅う宅たく  
に沙、し沙やか端つら羅りう電わ王は始しめ始として、  
わ和し修き吉りう電に至いた至る宝まで座、ほう飾さ飾をか飾さ  
り座、させ座らるゝ諸。もろ々く小のせう毒りう毒、とく  
りう電、こ黄かね金の璽よろ甲い甲か着ふ着と四を四きて四、よ四つ  
の門もん守を守ま守ほ守れり殿。さ規ても尋た玉つ玉ぬ玉る玉た玉  
ま別を殿は殿、へ別ち殿にて殿ん殿を殿つく作つ作て作、た宝か宝  
ら桶のは立た並を並た並て並なら並へ並、か香う盛を盛も盛り盛、花  
をつ摘み中、二じ六ち時ち中中に中

「(四ウ)

は番ん居の居を居り居、  
い曲ね繞う繞  
か渴つか仰う仰  
中中く中に中、申申に申  
を及よ及は及さり及  
け及り及。八八人八の八

「(五オ)

(第十三回) 竜宮の情景

竜りゅう王わう、時じ々々刻く々くにく  
し守ゆ護こ護す護れ護は護、此此玉玉  
を取と取らん取事事、  
こ今ん生し生や生う生にて生は生か生な生ふ生ま生し生。  
ま未して未み未ら未い未に未  
と取り取か取た取し取。  
お思ほ思し思め思し思き思り思  
た給ま我へ我、わ我か我  
君君と君こ君そ君  
申申け申れ申。  
「(五ウ)

「(六オ)

か鎌ま足たり足、き開こ召し召め召さ召れて召、さ玉て玉は玉、た玉  
ま有の有あり有と有こ有ろ有を有、た見し見か見に見み見を見き見つ見る見  
物取か取な取。あ取り取と取た取に取も取お取も取ひ取な取は取、と取り取え取  
ん決事定は定け定つ定ち定や定う定なり定。り竜う竜と竜も竜も竜、は謀  
か取り取事取を取め取く取ら取し取、た取は取か取つ取て取と取り取た取れ取は取、  
わ我れ我も我た我く我み我を我め我く我ら我し我、た取は取か取つ取て取と取

「(七オ)

るへきなり。それりうしんと申は、五すい  
 さんねつひまもなく、くるしみおほき御  
 身なり。此くるしみをまぬかる事は、しら  
 へのを<sup>音</sup>とによもしかし。こゝをもつて  
 あんするに、りうわうをたはかるなら  
 は、まいとくはけんにてたはかるへし。此  
 うみのおもてに、こくらくしやうとをま  
 なび、玉のはたほこ、百なかれたてなら  
 へ、さて又、かくやをさうにかきつて、左右  
 のけんくはんをしらへすまし、そのみき  
 りに、みめよきちこをそろへ、をんかく  
 をそうするほとならは、たゝ天人ににた  
 るへし。さあらんときに、大そうじやう、から  
 りんをうちならし、上天けかいのりう  
 しんをおとろかし、くはんしやうするなら  
 は、すゝめによつてかみほとけのそみ、らい  
 りんましまさは、りうくうのみやこよ  
 り、八大りうくうをさきとして、そこはこ  
 のけんそくともをひきくしていてら

「(七ウ)

るへし。そのあひたは、りうくうかいに竜  
 一人もあるましきそ。入すのあひたを  
 うかかつて、そろりといりてぬすみとつ  
 て、やああたへかしとそ、おほせける。あま  
 人うけたまはり、あらゆゝしのきみの  
 御たくみやさふらふ。かゝるせんけう  
 なくしては、いかてたやすくとりえ  
 なん。たゝし、入すの間なりとも、玉の  
 けいこはあるへし。たといむなく  
 なるとも、玉にをひてはしさいなく  
 とりあげ、君にまいらすへきか、もし  
 もむなくなるならは、またたら  
 ちうのみとり子の、ちふさはなるゝ  
 事もなし。君ならては、のちの世  
 をあはれむ人のあるへきかとして、なく  
 よりほかの事はなし。かまたりきこ  
 しめされて、心やすくおもへ。もしも  
 むなしくなるならは、けうやうの  
 そのために、ならのみやこに大からん

「(八ウ)

「(九オ)

を建立こ入りうすへし。又、此わか若かにい

ては、いまた幼稚ようちなりといふとも、みや

こへく具足そくし、天下の御目めにつかけ、ふさ

きの大しんとかうし、藤原の棟とうりや

うたるへきよしを、こま由くとのた

まへは、あ海女ま承人、うけたまはりて、よろ

こふ事はかきりなし。やかて、みやこへ

しし使者やをたて、まいぬしをめしくたし、

あたりのうらのふねをよせ、しゆたん

をもつていろとれるふたいをこそはり

たてけれ。十ちやうのはたほこ、百な

かたてたならへ、かせにまかせてひる

かへせは、さうかいはやかてじやうど

なる。ひたりみきのかくやにかさりた

てたる大たいこ、まんまくをあけさ

せ、しゆれんにたまのすたれをかけ、

はうさをさうにかさつて、うけんち

とくの大そうしやう、からり唐んをうち打ならし、  
上天てん下界かいのりうしんをおとろかし

「（九ウ）」

しやうすれば、八電大りうわうしゆらいし

て、せん兪きま議ちく南なりけり。なんせむ

ぶしう、ふさ房き崎のうらにして、ほう宝ざ座を

かさり、ちうしやうある。いさやらいりん

やうかうなりて、ちやうもんせん聞とせ

んきして、そこはく若のけん眷そくとも

をひきく引してこそ出いてられけれ。す

てにりうしん神いてたまへは、

国中のちこ稚たち、身を

かさり節まうけ

こゝを

先途せんとと

まいたまふ。

たゝ、てん

人にんのことく

なり。

「（一一オ）」

（第十四回）舞と管絃を見る竜王たち

「（一一ウ）」  
「（一二オ）」

去程 電神 衰熱  
 さるほどに、りうしん、五すい三ねつ、  
 たちまぢまぬかれたまひけるあい間  
 た、な<sup>阿</sup>に事もうちわすれ、まいに<sup>舞</sup>  
 みとれたまひて、ふさ<sup>房</sup>つきに日をそ<sup>崎</sup>  
<sup>見</sup>送<sup>送</sup>をくらるゝ。すはや、ひまこそよけれ  
 とて、あまも、<sup>海女</sup>いてたちをそかまへける。  
 五しきのあやをもつて身をまとひ、  
<sup>色</sup>夜くはうのたまをひたいにあて、かね<sup>鉄</sup>  
 よきかたなわきはさみ、ぬのつなは  
 はしをこしにつけ、なみまをわけ<sup>波</sup>  
 てつつといり、た<sup>入</sup>といなんし<sup>男</sup>の身な<sup>子</sup>  
 りとも、一人うみにいらん事、とくの<sup>魚</sup>  
 うを、りう、かめ、大しやのをそれもある  
 へきに、申さんや、をんなの身と<sup>女</sup>  
<sup>有</sup>ありて、一人うみへいる事は、たくひす<sup>少</sup>  
 くなき心かな。すせん万里の<sup>海</sup>かい  
<sup>路</sup>ろをすぎ、りうくうのみやこにつく。  
<sup>夜</sup>やくはうのたまにて<sup>照</sup>らされて、くら<sup>暗</sup>  
 き所はなかりけり。ことさらみ<sup>見</sup>をきた<sup>置</sup>

「(一二ウ)

りし事なれば、まよふへきにて<sup>候</sup>  
 さらわす。りうくうのはうてんにあ<sup>崇</sup>  
 めをくすいしやうの玉、おもひのま<sup>思</sup>  
 にぬすみとりて、こしにつけたる<sup>約</sup>  
<sup>東</sup>くそくのぬのつなをひ<sup>引</sup>けは、せんち<sup>船</sup>  
 うの人々、あはや、やくそくこゝなり  
 と、手てにつなをくりあくる。あまも<sup>海女</sup>  
 いさみてかつ<sup>潜</sup>けは、うへよりいと<sup>上</sup>ひき<sup>引</sup>  
 にけり。いまはかうとみえし<sup>見</sup>ところに、  
 たまをまほれるせうりう、此よしを<sup>由</sup>  
<sup>玉</sup>みつけ、あともとめておふ事は、た<sup>追</sup>  
<sup>見</sup>みつはのそやを<sup>射</sup>いることく、せんち<sup>船</sup>  
 の人々、あはや、ほのかにみゆるは。くり<sup>繰</sup>  
 あけよ、とけちするに、あまの<sup>海女</sup>あと<sup>跡</sup>  
 について、ひとつの大しや、をふて<sup>追</sup>  
<sup>来</sup>くる。たけは十ちやうはかりにて、ひ<sup>曙</sup>  
<sup>剣</sup>れにつるきはさみ<sup>立</sup>たて、まなこは、  
 た<sup>映</sup>夕日のみつにうつろふことくな<sup>先</sup>  
 り。くれなぬのことくなるしたのさき<sup>舌</sup>

「(一三ウ)

「(一三ウ)

をふりたて、すきまなくをつかくる。

あま、かなはしとおもひけるあひた、

かなたをぬいてふせきけり。せん

ちうの人々、此よしを御らんし、手

をあかき、身をいたき、おつつ、ふいつ、こ

ろんつ、あはやくとおほせけり。かま

たり御らんし、きよけんをぬき、よう

ちのとき、きつねのあたへたひたる

一つのかまにとりそへ、とんていらんと

したまふを、せんちうの

人々、ゆん手めてにすかつて、

こはいかにとて、とめけり。

「（二四才）」

「（二四ウ）」

（第十五回） 船中の人々と小竜に追われる海女

「（二五才）」

すてにはや、このつなのこりすくな

くみえしとき、大しやはしりかゝ

つて、なさけなくも、かのあまの二つ

のあしをけちきれば、みつのあはと

そきへにける。むなしきしさいをひき

あけ、しよにんのなかにこれををき、

一とにわつとさけふ。かまたり、御ら

んして、玉はとり得ぬものゆへに、

二世のきゑんはつきはてぬ。むねの

あひたにきざあり。大しやのさける

のみならずと、あやしめ御らんあり

ければ、此きすのなかよりも、すいし

やうの玉いてさせ給ふ。さては、大しや

のおつかけしとき、かたなをふるとみ

えしは、ふせかんためになくして、たま

をかくさんそのために、わか身をかいし

けるかとよ。せめて此きすを、わか

身すこしおいたらは、かほとにもは

おもふましきを。をんなははかなきあ

りさまかな。おとこのめいをそむかし

とて、いのちをすつるはかなさよ。とも

し火にきゆるよるのむしは、つまゆ

へその身をこかすなり。ふえによる

「（二五ウ）」

「（二六才）」

あきのしかは、はかなきちきりに

いのちをうしなふ。それは、みなく、し

うあいれんほのわりなきちきりと

はいひなから、かゝるあはれはまれ

なるへし。われには二世のきゑんなれ

は、又こん世にもあいみなん。なんちは

いまこそかきりなれ。わかれのすかた

をよくみよとて、いとけなきわか君

を、しかいにおしそへたりければ、し

たるおやとしらぬ子の、此ほとは

しさに、むなしきちふさをふくみ

つゝ、はのむねをたゝくを

みて、上下はんみん

おしなへて

みなくなみたをそ、

なかしける。

あまはむなく成たれと、かしこ

きせんけうはうへんにより、りうくう

┌ (一七オ)

かいへむははれしむけほうしゆを、こ

とゆへなくむはい返したまふ事、

ありかたしともなかくに申にをよ

はさりけり。この玉は、すなはち、をく

りふみにまかせて、こうふくしの本

そん、しやかほとけのみけんゑり

はめたまひけるとかや。しやうじん

のれいさう、しやくせんたんのみそ

きにて、五すんのしやかをつくり、にく

しきの御しやりを御しんにつくり

こめなから、方八すんのすいしやうの

たうのなかにおさめ、むけほうしゆと

名つけ、三国一のとてうはう、りう王

のをしみ給ひし、ことはりところ、き

┌ (一八オ)

┌ (二六ウ)

┌ (二七ウ)

〈注〉

（二才）はくちよ……「白女」で海女の意。海人の意の「白水郎」による連想か。

（三ウ）ひとつのかしらをさきとして……文意不明。

（四才）れいか……美しい川。

（四ウ）まんしゆ……海に投げ入れると潮が満ちる靈力があるという玉。

（五才）しやかつらりうわうはしめとして、わしきりうにいたるまで……八大竜王の面々。

（五ウ）いねうかつかう……周囲をめぐって深く信仰礼拝すること

（七ウ）五すいさんねつ……五衰は、天人が死ぬ前に現われるという五種の衰相。三熱は畜生道で龍・蛇などが受けるとされる三つの苦しみ。

（八才）かくや……雅楽で、楽人の演奏する場所。

（八才）みきり……そのとき。

（九才）たらちう……本来は親をさす「たらちね」の転か。

（九ウ）けうやう……死者の後世を弔うこと。

（九ウ）天下……国を支配する者。

（九ウ）ふきゝきの大しん……歴史上の人物としての藤原房前（天武十年～天平九年）は、藤原不比等の第二子で藤原北家の祖。

（一〇ウ）なんせむぶしう……閻浮提。須弥四洲の一つ。須弥山の南方海上にある大陸。もとインドの地を想定したもので、のち人間世界・現世を意味するようになった。

（一〇ウ）ちうしやう……「招請」の誤りか。

（二四ウ）おつつ、ふいつ、ころんつ……追ひつ、臥しつ、転びつ」の音便形。

（二四ウ）ようちのとき、きつねのあたへたひたる一つのかま……鎌足が生まれた際に白狐（茶杓尼天）が鎌を与えたので鎌足と称したという伝承がある。

（二七ウ）しやうじんのれいさう……釈迦の姿を生き写しにした像。

（二七ウ）一八才）みそき……神仏の像を造るのに用いる木材。

（二八才）しやり……釈迦の遺骨、仏舍利。

(一八才) むけはうしゆ……無<sup>げ</sup>価とは値段が付けられないほど高価なこと。『法華経』「五百弟子授記品」に説く「衣<sup>え</sup>裏の宝珠の喩え」(仏に結縁する仏種を懐きながらそれに気付かない愚かさの喩え)の無価宝珠に由来する名称。

〈校異〉

(一ウ) りうくうかいにーりうくうかいへ (卷子本)

(寛永版)

(四ウ) ー(五才) かけかけーかけ (卷子本) (寛永

版)

(五才) はしめとしてーはしめとし (寛永版)

(六才) みらいにー未来て (卷子本) (寛永版)

(八ウ) かみほとけのそみー神ほとけのかみ (卷子本)

(八ウ) 八大りうくうー八大りうわう (卷子本) (寛永

版)

(八ウ) ぬすみとつてやああたへかしーぬすみとつて

やあたへかし (卷子本) (寛永版)

(一〇ウ) そこはくのーそこはこの (卷子本) (寛永

版)

(二三才) やくはうのたまー夜光のたま (卷子本)・夜

光のさま (寛永版)

(一四ウ) かなたをーかたなを (卷子本) (寛永版)

(一六才) なくしてーなくし (卷子本) (寛永版)

(一七才) みなくなみたをーみななみたを (卷子本)

(一七ウ) まかせてーまかせ (卷子本) (寛永版)

(一八才) 給ひしー給ひしも (卷子本)

## あとがき

本冊の刊行をもって、『立正大学古書資料館蔵『大職冠』―影印と翻刻―』（全三冊）が完了します。本冊の内容は、令和三年度1期科目「書物の基礎2」履修者の学生諸君と授業中に進めた作業の成果を反映させたものです。昨年度以来のコロナ禍の影響で、当該授業はオンライン（教材配布型）での実施となりました。これまで経験したことのない環境下、手探りで進めた授業でしたが、お蔭様でこのような形にまとめることができました。

また、本書上巻刊行後に、小林健二編『絵解く 戦国の芸能と絵画 描かれた語り物の世界』（三弥井書店、令和2年3月）が刊行されました。同書所載の恋田知子「江戸前期の幸若舞曲絵巻・絵本の制作―「大職冠」と「敦盛」を例として―」には、本書収録の『大職冠』を取り上げて頂き、その伝本としての特徴や位置付けが分析されています。恋田先生には厚く御礼を申し上げますと共に、本書の読者の皆様には、是非、同書をご参照頂きたく存じます。

なお、本書上巻にも記しましたが、翻刻と注を付す作業にあたっては、麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系59 舞の本』（岩波書店、平成6年7月）を参照させて頂きました。あらためて感謝を申し上げます。

最後になりますが、本書刊行にあたっては、立正大学図書館学術情報課、島田貴司氏、水上裕子氏、田中麻巳氏、小此木敏明氏に、種々ご高配をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

令和三年十二月吉日

伊藤 善隆

### 【編著者略歴】

伊藤 善隆（いとう よしたか）

昭和44年（1969）東京都生まれ。

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程退学。

早稲田大学文学部助手、湘北短期大学教授等を経て、現在、立正大学文学部文学科日本語日本文学専攻コース教授、博士（文学）。

著書：『初期林家林門の文学』（古典ライブラリー、2020）など。

### シリーズ・アタラクシア vol.6

立正大学古書資料館蔵 奈良絵本『大織冠』下巻  
—影印と翻刻—

---

令和4年2月25日初版発行

編著者 伊藤 善隆  
編集 立正大学品川図書館  
発行 立正大学図書館  
〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16  
電話 03-3492-6615  
<https://www.ris.ac.jp/library/>

印刷・製本 株式会社イーフォー  
〒141-0031 東京都品川区西五反田 8-7-11  
電話 03-3779-1140

発刊の辞

戦後まもない一九四九年、  
立正大学図書館年報「アタラクシア」創刊号が  
発刊された。

戦禍を潜り残された貴重な資料を手に、  
知の泉たらんとする大学の志は、  
図書館の場からも発せられた。

書庫の奥に何時もあり、

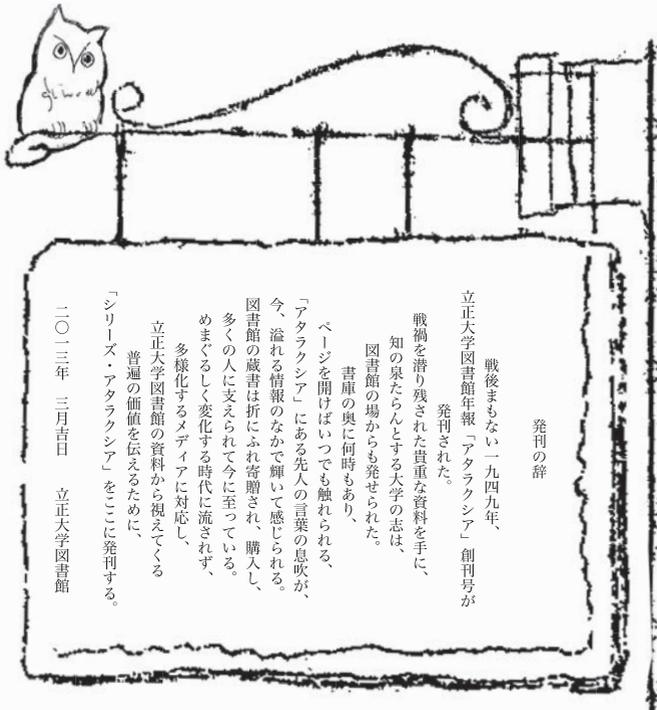
ページを開けばいつでも触れられる、  
「アタラクシア」にある先人の言葉の息吹が、  
今、溢れる情報のなかで輝いて感じられる。  
図書館の蔵書は折にふれ寄贈され、購入し、  
多くの人に支えられて今に至っている。  
めまぐるしく変化する時代に流されず、  
多様化するメディアに対応し、

立正大学図書館の資料から掘えてくる

普遍の価値を伝えるために、

「シリーズ・アタラクシア」をここに発刊する。

二〇一三年 三月吉日 立正大学図書館



立正大學圖書館

